注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
パパのいうことを聞きなさい！――双子の弟は頑張ります――

【作者名】
陽光

【あらすじ】
瀬川祐太の双子の弟、瀬川翔太が兄と愛する娘達のために色々と奮闘する物語

第一話　ぷろろ～ぐ？

唐突だけど、僕――――瀬川翔太の人生はなかなかに大変だと思うんだ。

――――――幼い頃に両親が死んで、双子の兄さんと揃ってたくましい姉に育てられたこととか。

なかなかお眼にかかれないドラマのような設定だけど実際に経験したことだ。そして今まさにそれと同じように普通に暮らしていてはありえないようなことが目の前で起きている。

――――――今眼の前の（大学に入学して心機一転、兄さんと二人暮らしをするはずだった）大学の寮の部屋に、中学生、小学生、幼稚園児の三人の女の子と住むことになったこととか。

『何で？』って聞かれても困る。説明するには時間がかかるし、何より僕自身がおそらく一番分かってないかも知れない。

ただ、一つ確かなこととしては、これから僕は、女の子という難解な生き物のパパという役目を、兄さんとともにやっていかなきゃいけないということだけ……どうなることやら…。

第二話　ぷろろ～ぐ2

「トイレはダメー！」

早朝。５人が住むにはいささか狭過ぎる部屋に小学生の悲鳴が響き渡る。僕は朝食を準備する手を止め、悲鳴の主の方へ耳を傾けてみる。断片的に聞こえてくる会話から察するに、どうやらうちの兄さんが、トイレ、お風呂、洗面台が１つになったユニットバスに入ろうとしたところを、金髪ツインテールの美少女小学生―――美羽ちゃんに止められたらしい。何でも、女子が入った後は１時間空けないとトイレに入ってはいけないらしい。我が瀬川家の次女の談です。つまるところ、この部屋はユニットバスなので、トイレどころか顔も洗えない。……やはり、男には分かりにくい年頃の女の子なんだろう。止まっていた手を再度動かして朝食の準備を終えると、ちょうど兄さんが、ボサボサの頭で食卓についたところだった……説得の甲斐も虚しく、顔を洗えなかったらしい。僕のように早起きすれば、というのは昨日夜のバイトだった兄さんには酷ってものだ。今日の帰りにでもフローラルな香りの消臭剤でも買ってこよう。数分前兄さんもそんな事を考えていたと知るのはもう少し後の話。

「おはよう、兄さん」

「おう、おはよう。頭に関しての質問は受け付けん」

「了解。というか空ちゃんたちの行った後に後にすればいいじゃん」

「あ～。そうだな」

兄さんと軽く会話。兄さんの頭がこんなままの原因の小学生は今荷物の再チェック中らしいです。すると、行儀良く食卓についていた我が家の天使こと、3歳児のひなちゃんが兄さんの頭を見て

「おいたんのかみぼーんってなってるねー、ぼーんって」

盛大に笑い出す。この年頃の子は笑いの沸点が低い。でも、素直でとっても可愛いんだよね。

「ひな、あんまり笑わないでくれ。ことによると、俺はこの頭のままで大学に行かないといけないんだから」

「そうだよ、ひなちゃん。おいたんだって好きでこんな頭でいる訳じゃないんだから」

ちょっと、ひなちゃんをたしなめる。それにしても不憫だ。あの頭のままで大学に行けというのはつらい。

「おくれちゃいましたー、ごめんなさい。ちょっとプリントの確認に時間かかっちゃいました」

「もー、美羽ったら。そういうのは前日にやっときなさい」

そんなことをカケラも気にしていなさそうな美羽ちゃんが、セミロングの髪をした中学生の姉———空ちゃんと一緒に食卓についた。この家では空ちゃんは兄さんよりも上の立場を確立している恐るべき中学生です。ちなみに今朝の献立はトーストにコーンスープ、オム

レツにサラダといういたってシンプルなものだ。

「んじゃ、食べようか」

「そうだな。いただきます」

「「「いただきます」」」

兄さんの号令で皆一斉に朝食を食べ始める。一応この中では一番年上なのです。立場的には下だし、威厳もあるとは言いがたいんだけど。

「もー、祐お兄ちゃん、朝食前に顔くらい洗ってよ」

空ちゃんが兄さんの若干脂ギッシュな顔を見て言う。出来ればその文句は平然とご飯を食べているあなたの妹に言って欲しいなぁ。兄さんもそう思ったのか反論しようとしたが口にする間も無く我が家の姫の要求が来た。

「ひな、いちごのじゃむー！」

「はいはい。今とってあげるからあんま付け過ぎちゃダメよ」

「翔叔父さん、あたしサラダだけでいいって言ったじゃないですか」

「それはダメです。女の子でも朝はしっかり食べなきゃ体に悪いよ」

「ああっ、もう！ひなっ、ジャム付け過ぎちゃダメって言ったじゃない」

「やー、べとべとするー」

「あ、こら、あんまり動いたら……」

バシャ！

「あー、ひなが牛乳こぼしたー」

「ああっ、大変！制服にかかっちゃったっ」

「お姉ちゃん、はい、布巾パス！」

「ありがとっ。美羽はそっち拭いて！」

朝から随分とにぎやかだ。ついこの間までは男二人がテレビ見ながら飯食うだけの虚しい空間だったのに。朝食も作ってはいたけどこうしっかりしたものを作るのは珍しかった。

「ちょっと、お兄ちゃん達！ボーっと見てないで、拭くの手伝って！」

我が家のしっかり者の長女、空ちゃんに怒られる。空ちゃんはホント中学生とは思えないほどしっかりしていて一緒に暮らし始めてから兄さんはよく怒られてばかりいる。……僕？僕はあまり怒られない。怒られるようなことはしていないからね。でも、この前同期の女の子と歩いてたら猛烈に不機嫌になって、しばらく口きいてくれなかったなぁ。なんでかは今でも謎です。ま、そんなことは置いといて。僕もひな救出作戦に参戦しなくては。

「はいはい」

「ゴメンね。つい考え事してて……ていうか、兄さんの服にも牛乳かかってる」

「え、マジで!?」

「あー、待って。あたしが拭いてあげますから。ジッとしててくださいね」

次女の美羽ちゃんはとにかく大人っぽい。ときどき小学生ということを忘れてドキッとしてしまうがそれは内緒だ。もちろんその印象は僕だけのものじゃなくて、今なすがままに服を拭いてもらっている兄さんも複雑な表情をしている。

「おいたん、おいたん！」

「んー、なんだひな」

そして、三女のひなちゃん。三歳だ。僕達双子の姉さんの娘で、三人の中では唯一血のつながりがある。

「おいたん、あたまぼーんってなってる！」

「それはさっき聞いたって……」

やめたげて！兄さんのライフはもうゼロだ！……ゴホンッ。こうしてにぎやかな朝を迎えるのも今日で二週間ほどだ。完全にとは言い難いがこの光景もすでに日常と化してきている。

「叔父さんたち、今日はバイトですか？」

「俺は大学行って、一度帰ってから行くよ」

「僕は兄さんと違ってシフトが少ないから、今日は無いよ」

「じゃあ、今日はみんなでお夕飯食べられるんだ」

空ちゃんが少し嬉しそうに言う。

「ひな、はんばぐ！」

「もう、ひなってば、そればっかり」

「んじゃ、僕も張り切っちゃおうかな！」

「ちょっと待って翔お兄ちゃん！今日は私が作る！」

空ちゃんが発した一言によって食卓の空気が凍った。唯一ひなだけは、美味しそうにいちごジャムたっぷりのパンを頬張っていたが。

「お、お姉ちゃんが作るの？」

「で、できれば、翔一人に任せたほうが……」

「そ、空ちゃんは次の機会に、ね？」

「ひな、にいにのはんばぐたべたい！」

「こ、今度は失敗しないわよ！ほんとに！絶対！間違いなく！」

僕達の頭の中では炭素の塊となったハンバーグが列を成して踊っていた。怖い。

「よし！じゃあ、翔！今日は任せた」

「美味しいの頼みますね」
「ひな、あいすもたべたい」
「任せてよ。アイスは大学の帰りにでも買っとくからね、ひなちゃん」
「あ、アンタたち……」
空ちゃんが顔を真っ赤に染めて両手を震わせる。
「ぜーったい、私が美味しいの作ってやるんだから、覚悟しなさいよ！」
グシャ
宣言と同時に、その手の中にあった牛乳パックが握力に耐え切れず無残に潰れた。飛び散る白い液体。
「あーっ、お姉ちゃん！まだちょっと残ってる！」
「きゃあーっ！」
「あはははは！おいたん、あたまぼーんぼーん！ねーたんもぼーん！」
「兄さん、ティッシュ取って！」
「了解！」
返事と同時にティッシュを取りに行った兄さんだが、フト、動きが止まった。どうしたのだろうと、兄さんの視線の先を見てみると理由がわかった。てか非常にまずい。

「ヤバイ！ひなの保育園に遅刻する！」

「えーっ！」

「急いで食べろ！朝食抜きなんて保護者として許さないぞー！」

「空ちゃんたち、あとは僕が拭いとくから早くご飯食べちゃって」

空ちゃんからティッシュを受け取り飛び散った牛乳を拭いていく。

「はーい！」

ひなは可愛く返事をしてトーストにかぶりつく。

「了解です。翔叔父さんすいません」

そう返事をすると、アイドルのような小さい口にこれでもか！ってほどのトーストやサラダを詰め込み始める美羽ちゃん。その口はブラックホールですか？

「ありがと、翔お兄ちゃん。……保護者ってよりもお義兄さん？」

なにやらブツブツ言いながらもテーブルに座ってもぐもぐと朝食を頬張る空ちゃん。頬がちょっと赤いのは何でだろうか？そんな空ちゃんを横目に見ながら兄さんも負けじとトーストを口に押し込んでいく。そんなみんなの様子を微笑みながらみる僕。すでに食べ終わっている。何時の間にとは聞かないで。この後は兄さんがひなを保育園に送って、大学行って、バイトして、僕は5人分の夕食作って。こんなのが日常になるなんて2週間前はとてもじゃないが思いつかなかっただろう。ましてはこの子達のパパになるなんて。まだ、大学

生で成人もしてない僕らに。

この狭い部屋での５人の共同生活は――――――――――――こんな感じでスタートしました。

第三話　よよよ？その１

「よよよ……」

「うぷッ、気持ちわる……え？なにこれ？どういう状況!?」

「織田くん！もっと感情込めて！」

「こんなのする必要あるんですか？」

「さぁ？オレに訊かれても？」

真っ暗な部屋。僕はそこで、さっきのコンパで知り合った仁村君と一緒に双子の兄にスタンドライトを当てていた。ライトに照らされている兄さんは困惑しており、その視線の先には無表情でモデルのようなスタイルの美人女先輩――――織田來香さんと、小太りで肩幅の広い眼鏡の男先輩――――佐古俊太郎さんが思わず呆れた視線を送りたくなるようなやッッッすい三文芝居を繰り広げている。いわゆるカオスな状況ってところ。僕はそんな兄さん達に呆れた目（ついでにライト）を向けながら数時間前の出来事を思い出していた

――――――――

□　□　□　□　□　□

「それではッ！新しい仲間の誕生を祝して、乾杯ッ！」

『『かんぱ～い!!』』

乾杯の音頭がそう広くない居酒屋に響き渡る。そこでは数十人の若者が三三五五にテーブルに散らばっていて、ある人はこれから先の生活への期待や不安を語り、ある人はそんな事を話す者を温かい眼で見ながら時には必要事項を教えたり自分の経験を語ったりしている。他にもサークルの勧誘であったり、講義の内容であったり、会話は様々ではあるけど共通していることといえば皆和気藹々としていることかな。前述で察する事のできた人は多いと思うけど今は新歓コンパ――――多摩文学院大学文学部新入生歓迎コンパの真っ最中。隣の席には兄さんとナゾのイケメンさんが居る。そしてそのイケメンさん目当てか女の人が三人程、対面の席に座っていた。正直居心地が悪い。だって――――

『ねえねえ、そこのキミ。名前はなんていうの』

「仁村浩一って言います。先輩みたいな美人に名前を聞かれるなんて光栄ですね」

『あら、お上手ね』

『あ～！ズルイですせんぱ～い。抜け駆けは駄目ですよ～』

『そうですよー。仁村クンは特技とかあるの？』

「特技ってほどじゃないけど料理はするよ。今度オレん家でご馳走しようか？」

『え～！ホント～？いいの？』

「全然構わないよ。あ！先輩やキミ達もどう？」

『じゃあ、頂こうかしら』

『やったー！すっごく楽しみだなー、仁村君の手料理』

こんな会話がずっと繰り広げられているんだもん。明らかに僕が居るべき場所じゃないっていうのが分かる。それにしても、イケメンさん――――仁村くんって言ったっけ？仁村君はこういう状況に慣れてるみたいだ。やっぱりイケメンさんは違うね。でも巻き込まれないだけマシかな。そう思ってグラスのビール（もちろんノンアルコール）を煽ろうとする。でも、そこで何故か前の席の女の人の一人が急にこちらを向いた。あれ？さっきのはフラグ？

『あれ～、こっちの子よく見たらすごく可愛くないですかぁ』

『あら、ホントねぇ』

『キミ名前は？』

巻き込まれたー！ていうか、フラグでした。僕はいいからどうぞ向こうのイケメンさんに戻って下さい、お願いします。こういうのあんまり得意じゃないんだよねぇ。積極的な女の人は苦手だし、そういうことに興味があまり無いし、顔にも自信が無い。でも名前聞かれたんだし一応名乗らなくちゃ。そこから兄さんにでも関心を移らせることにしよう。兄さんゴメンね。

「あ、瀬川翔太って言います。で、隣に座っているのが僕の兄ｓ――――――ってどうしたの兄さんッ!?」

紹介する（生け贄に捧げる）為に横を向いたら兄さんが倒れていた。慌てて顔を覗き込んでみる。顔が赤いが熱でもあるんじゃ！「……グゥ」

「…ッ！」

握り締めた拳をなんとか収める。寝てるだけとか。まったく、心配して損したよ。ていうかノンアルコールビールって知らなかったのかな。気分だけで酔ってしまえる兄さんは逆に尊敬すべきなのかもしれない。

でもこれはある意味好都合。新歓コンパも仁村君と女の人たちの会話を時々聞きながらご飯を食べてたおかげでもう終盤。兄さんのことを理由に一足早く退散しても空気を乱すことは無いだろう。二次会とかにも行かなくて済むし。そう結論付け、口を開く。

「すいません。兄が潰れてしまったようなのでお先に失礼します」

『ええー、残念』

『ていうか、ノンアルコールで潰れるって…』

『じゃあね～』

よし成功！お金をテーブルの上に置いて席を立つ。そして隣の兄さんを担ごうとするんだけど……重い！僕は非力な方だから自分よりちょっと重いくらいの兄さんはキツイ。いろんな持ち方を試してみるがどれも上手くいかない。入り口の方まで移動するのがやっとだ。はぁ、しょうがないから今日はタクシーでも拾って帰ろうか。…

出費がかさんじゃうなぁ。そう試行錯誤していると、予期せぬ言葉が後ろから聞こえてきた。

「おい、大丈夫か？」

振り向くとさっきのイケメンさん、もとい仁村君がこっちに歩いてくる。

「僕、力無いんで担げなくて。でもタクシー拾いますから大丈夫です」

「金とか大丈夫か？」

「まぁ出費は痛いですけどそうしなくちゃ家に帰れませんから」

「オレが担いでいってやろうか？」

「へ？」

「だから、オレが担いでいってやるよ。家は何処だ？」

「男子寮ですけど…」

「んじゃ、問題無いな。行くぞ」

「あ、ちょっと！」

仁村君は兄さんを担ぎ上げるとさっさと店を出て行く。でも、さっきの女の人たちはいいのだろうか？…すごく落ち込んでるよ。まぁ仁村君目当てで席まで来たのに終了前に帰られちゃったらねぇ。僕と兄さんも帰るからあの席には女の人三人だけだし。

「お～い！早く来いよー！」

「あ、今行きまーす！」

仁村君が呼んでくる。

ヤバイ、ヤバイ。さっさと行かなきゃ。折角兄さんを背負ってくれているんだから待たせちゃ駄目だ。慌てて店を出て仁村君のところへ向かう。

だからだろうか。僕はまだ後ろの二つの影に気がつかなかった

――――

第四話　よよよ?その2

夜空に浮かぶ月と、薄暗い街灯が僕らを照らす。

東京とは名ばかりの緑溢れる風景は夜になると若干怖い。

何故そんな道を歩いているのかというと理由は単純なこと。

僕らが通うことになっている多摩文学院大学はなんと山の緩やかな斜面の上に建っている。

まぁ入学説明会の時は正直こんなところにくるとは思ってなかったよ。

そしてそんなところにある大学の寮は、大学を挟んで居酒屋の反対側に位置するので自然と大学の前を通らなくちゃいけない。

だから今僕は兄さんを背負った仁村君と一緒にこの自然の多い田舎道を歩いているわけだ。

「ホントありがとう。助かったよ」

「いーや、気にすんなって。目の前に困ってる奴がいたら助けるのが当然じゃん」

…おぉ。顔だけじゃなくて、言動もイケメンだ。いい人っぽい「ただ、もうちょっと女の子と喋ってたかったな」…まぁ、ちょっと遊び人みたいな雰囲気はあるけど。

「そういや、自己紹介途中で遮られたけど瀬川、だっけ？」

「うん。そっちは仁村君っていうんだよね。女の人たちとの会話で聞いたけど」

「そう。んで、これが双子の兄貴だっけか？」

これ、の部分で背負った兄さんを指す仁村君。

「そうだよ。まったくノンアルコールなのに気分だけで酔えるとか、我が兄ながら呆れちゃうけどね」

まったく。起きたら説教してやらなきゃ。

「ハハッ、面白い奴だな。ていうか、ホントに双子か？全然見えないけど」

「よく言われるけど、れっきとした二卵性双生児だよ」

そう。僕と兄さんは双子というには大分疑問に思うほど似てない。

兄さんは普通の一般的な顔立ちなんだけど、弟の僕は何故かそんな兄じゃなくて祐理姉さんにそっくりな顔立ちをしている。

つまるところ、女顔。無論精神はちゃんと男だし、あるべきものはちゃんとついてる。ただ、ちょっと非力かな。といっても男にしてはってくらいだけど。

そんな自分の容姿について考えてると聞き逃せない言葉が耳に飛び込んできた。

「…可愛い顔してんなぁ（ボソッ」

ザザァッ！

「ゴメン！僕そんな趣味ないから！」

「あー、ゴメンゴメン！ウソウソ！冗談だから戻ってきてッ！」

アヤシイ。一瞬見えた横顔がとても冗談を言う顔には見えなかったよ。

そうは思いながらも仁村君の背中には兄さんがいるので仕方なくとった距離を縮める。

こんなに過剰に反応をとらなくても良いんじゃないかと思うかもしれない。

でも僕はこの女顔のおかげで男から告白されることもあったんだ。

それも思い出したくないけど十人以上。アレはホント黒歴史だよ。中にはコッチが男だと知ってて尚も食い下がってくる人もいたし。

そんなことがあったから冗談といわれてもイマイチ信用できない。

でも、こんなことといってると相当自分に自信がある人みたいに聞こえるよね？ちょっと複雑…。

そんな理由が一割。まぁそんなわけで微妙に距離をとりながら歩いているともう大分大学の近くに来ていた。

「も、もうすぐ大学だな～？」

「…そうですね」

仁村君はあからさまにコッチの様子を窺うような声を掛けてくる。残念ながら僕はまださっきの発言を忘れているわけでは無いのですげなく返答。そうして次の角を曲がったときにソレは起きた。

「だ、大丈夫ですかッ!?」

後ろから聞こえた若干棒読みの声に僕も仁村君も思わず振り返ってしまう。そこには小太りで眼鏡を掛け、シャツをジーパンの中にインした典型的なオタクのような人。それにモデルのようなスタイルをした美人が居た。…なんだろう？見覚えがあるような？

「あれ、さっきのコンパに居た先輩じゃないか？」

いつの間にか距離を詰めて隣に立っていた仁村君の言葉で思い出した。

確かに居たような気がする。そのことには感謝するけどさりげなく距離をとる。

まだ疑惑は消えない。…根に持ってる訳じゃないよ、決して。用心深いと言って欲しいな。

距離をとられたことにショックを受けている仁村君を無視して再び先輩方に視線を戻す。

さっきはスルーしたけど女の先輩は道路の真ん中に倒れており、男の先輩はそれの隣でなにやら騒いでいる。

普通なら慌てて駆け寄って安否などを確認するところなのだろうが、今そんなことをする気は起きない。

別にいま不機嫌な訳でもなければ、人助けなんてしても得なんてない、みたいな薄情な考えを持っている訳でもない。では、何故か。

「……あうぅ。」

女の先輩が明らかに棒読みだから。明らかに演技と分かる。というかアレで本当に演技をしているつもりなのだろうか。顔もありえないほど無表情。現に男の先輩も慌てている。

「織田くんッ！もっと苦しそうにッ！」

すいません。声を抑えてるつもりでしょうがバッチリ聞こえちゃってます。

それに居酒屋を出てからなにやら後ろでコソコソしている人が居ると途中で気がついたんだけど、この様子だと先輩達が機会を窺っていたみたいだ。

でもなんでこんなことをする理由が分からない。意見を求めるように仁村君のほうを見てみるけど困ったような苦笑を浮かべるばかり。どうしよ…

「……うわあああ」

「なんて苦しそうなんだ！誰か手を貸してくれる人はいないのかッ！」

こちらが何のリアクションも起こさない所為か演技が激しくなった。ていうか近所迷惑なんでやめてください。もう十二時ですよ。それにコッチをチラチラ見るのもやめてください。助けませんよ。演技でしょうけど。

「おぉ！あっちに助けてくれそうな大学生二人組みが居るぞ！」

あ、ついに指名してきた。流石に業を煮やしたのだろう。でも、先輩。兄さんも居るので三人です。しかしこうしていても仕方ないので仁村君ともう一度顔を見合わせ、先輩の方へ近づく。

「どうされたんですか？」

一応形式的に聞いてみる。心なし冷たい口調になったのはしょうがないことだと思う。

「この人がいきなり倒れたんだ！近くの大学のサークル棟まで運んでくれないか？」

何で病院じゃないんだろうか。そしてなんとなく目的が分かった気がする。まぁ、もう深くはツッコムまい。いちいち水を差していても時間の無駄になっちゃう。言われた通り女の人を背負おうとすると仁村君から声がかかる。

「大丈夫か？俺がやってもいいぞ？」

「大丈夫。女性一人運べないほどひ弱じゃないよ。…僕は男だし」

「だぁから誤解だってッ！」

「それに仁村君に運ばせるのはなんか危険そうだし」

「まさかの信用ゼロッ！」

別段驚くことでもないと思うんだけど。それにしても女性の方はすでに苦しそうな演技を止めていて、ただ目を閉じているだけ。…なんか運ぶ気失せるなぁ。しかも結構身体を密着させなきゃいけないからグラビアモデルが見たら泣き崩れそうなほど豊満な胸が背中に当たってちょっと辛い。いや、僕だって男だし決して嫌なわけじゃないけど。

そんなこんなでサークル棟までのクネクネとした坂を、先輩を背負いながらえっちらおっちらと登って行く。小太り先輩は僕らの一歩先を歩き先導する。そして着いた先はサークル棟のたくさんある部室の一つ。どうやらこの人達のサークルのものらしい。ただ入り口のネームプレートに『路上研究会』と書いてあったのは出来れば見なかったことにしたい。活動内容が不明過ぎるよ!?

とりあえず目的地に着いたので先輩を下ろさせてもらう。

「……なかなかの乗り心地だった」

相変わらずの無表情でコッチを向いてお礼？を言ってくる先輩。正直どう返したら良いのか分からない。とりあえず、いえいえ、と返しておく。そんな先輩は小太り先輩の元に歩いていくと、なにやら話しだした。その間に兄さんを壁際に下ろしている仁村君に話しかける。

「これ、どういうことかな？」

「わかんないけど、なんか始まるっぽいぞ」

そう言われて振り返ると先輩達がコッチを向いて並んでいる。そしておもむろにポージングをとる。

「……ようこそ」

「路上観察研究会へ！」

デデーン！

そんな音が今にも聞こえそうなポーズで高らかに宣言する先輩。もっとも高らかにというのは小太り先輩にしか当てはまらないけど。反応を窺うようにこちらを見るのでとりあえず一言言っておこう。

「これは一体なんですか？」

第五話　よよよ？その３

「つまるところ勧誘ってことか」

仁村君のこの一言が今回の一連の出来事の原因たるものを表している。

路上のあの演技も、此処まで連れて来たのも、全てはこのサークル――――――『路上観察研究会』、通称ロ研に新入部員を引き入れる為の事だったらしい。

…正直目的地が此処だと聞かされた時から薄々そんなことだろうと思ってはいたけど。どうやら現在ロ研には三年生で部長の小太りの先輩――――佐古俊太郎先輩と、二年生のモデルのような美人――――織田莱香先輩だけしか部員が居ないらしい。確かにこんな何をするかも分からないアヤシイサークルに入ろうとする物好きはなかなか現れないだろうね。だから、今回のように強引に部室に連れ込んで入部させようとしているらしい。

そんな話を聞かされた後、僕達が返事をする間もなく佐古先輩は仁村君を引きずって何かを手伝わせている。残ったのは僕と織田先輩。

「それで織田先輩…でしたっけ？」

「…違う」

「え？でも…」

確かに織田と名のっていたはずなんだけど。僕の聞き間違いだろ

うか？

「…その呼ばれ方は好きじゃない」

「はぁ？」

「…莱香ちゃんと」

なんの拘りがあるのか知らないけど、特に困る申し出では無いから呼び方を改めようと思う。本人がそう呼んで欲しいならそう呼ぶべきだよね。ただ、先輩だからちょっと気後れはするけど。

「えっと…じゃあ、莱香ちゃん」

「…なに？」

無表情の中に少し嬉しそうな表情が混じった気がした。勿論気がしただけだけど。それにしてもなんか個性に溢れてる人だなぁ。口調も必ず間がある。

「僕と仁村君はどうすれば？」

「…好きにすればいい？」

「いや、疑問系で返されましても…」

どうやら莱香ちゃんはあんまり理解しないで佐古先輩の案に参加していたらしい。部員が欲しいとかあんまり思ってなさそうだし。

どうしようかなぁ？別に入りたいと思っているサークルも無いんだけど、果たして家事に支障が出ないかとかそもそもどんな活動をす

るのかとか分からないことが多過ぎる。

とりあえず仁村君にでも相談しようかと思って室内を見渡す。

「…何やってるんですか？」

なんか今日は疑問を投げかけることが多い気がする。決して気のせいではないと思うけど。

いつの間にか兄さんが部屋の真ん中に設置されていて、その近くには頭にスタンドライトを乗せた仁村君と手にもう一つのスタンドライトを持った佐古先輩。

「ああ、瀬川弟くん。キミの分だ」

近寄ってきて渡されるスタンドライト。僕にもやれと？というか何をやるんですか。質問に答えてもらってないんですけど。

文句を言いたいんだけど佐古先輩はすでに莱香ちゃんのところに行って、また打ち合わせをしている。断片的に聞こえてくる内容からどうやら今度は兄さんを標的に据えたようだ。

そして兄さんの側で泣き崩れたような姿勢になる莱香ちゃんと、その近くで仁王立ちする佐古先輩。どうやら打ち合わせは終了したらしい。

「なに突っ立っているんだ、弟クン！キミも早く仁村君と共にライトを当てるんだ」

……もう考えるのは疲れたよ。後は兄さんが起きたら考えよう。

そう思い渋々仁村君の隣に行き、自分の兄にスタンドライトを向けるのだった。

僕……なにやってんだろう？

□　□　□　□　□　□　□　□　□

そして現在に至る、と。

こうやって意識を思考の海に飛ばしてるうちに兄さんたちの会話は一段落しそうになっている。

どうやら兄さんが莱香ちゃんの演技に気付いたらしい。気付かないほうがオカシイけど。『よよよ…』は流石にないと思うんだ。

まぁとにもかくにも、そろそろ兄さんに声を掛けてみようかな。

向けていたスタンドライトの電源を落として近寄る。

「おはよう、兄さん」

「ん、翔か？一体どういうことだ？」

「僕にも分からないんだけど…」

「まぁ、お互い災難だったってことだよな」

仁村君もライトの電源を落として話に入ってきた。兄さんは仁村君の顔を思い出していないようでヘンな顔になっているけど。

「あれ？俺何してたんだっけ…コンパでビールを飲んだ後の記憶が無いな…」

なにやらブツブツ言い出す兄さん。必死に今日のことを思い出そうとしているみたい。そんな兄さんの様子を見て俺と仁村君は顔を見合わせて苦笑する。

そしてそんな兄さんの前に立って語りだす佐古先輩。

内容は下品なモノだったんで聞き流していたんだけど、途中で莱香ちゃんがハリセンで叩いて止めてくれた。

佐古先輩は気持ち悪い声を出しながらもだえているけど、とりあえずグッジョブ莱香ちゃん。感謝の印としてとりあえず莱香ちゃんに向けて親指を立てておいた。

そしてそんな僕に親指を立て返してくれた莱香ちゃん。

「…ここは私に任せて」

「助かります、莱香ちゃん」

「…莱香ちゃん？」

「とりあえずお言葉に甘えて帰ろうぜ？」

疑問符を浮かべる兄さんを仁村君と共に引っ張りながら部室を後

にする僕らだった。

……結局、入部とかどうするんだろう？

第六話　よよよ？その４

すうぅ～

サークル棟を出て大きく息を吸う。

暦の上では春だが、まだこの時期の夜は冷える。長袖一枚では少し心許ない。

結局、佐古先輩の暴走を莱香ちゃんが止めているうちに部室を出た僕達。

そのまま、一緒に家へ向かい歩きだす。仁村君の家は一体何処なんだろう。兄さんを背負ってきてもらったけど、逆方向だったら大分迷惑だったかも知れない。後でさりげなく聞いておくべきだね。

兄さんは状況があまり分かっていない様子なので、僕が説明しようと思ったんだけど、既に当人は仁村君とお話中。

一緒に説明しようかな、と思ったけど見ていれば仁村君とも多少なりとも打ち解けていたのでその必要は無いみたいだ。

話している二人より少し後ろを歩き、途切れ途切れに耳に入ってくる会話をぼーっ、と聞く。

正直、暇で仕方ない。最初の考えを訂正して会話に混じろうかと思いはしたけど、いまさら加わるもなんか気まずいし。故に、ふらふらと後ろを歩くしかない訳だ。

そういえば、部屋のトイレットペーパーが切れていた気がする。

「翔～？」明日買い足しておかないとなぁ。だとしたらいつものスーパーでいいかな。「しょーおー？」あ、スーパーに行くならチラシをチェックしとかなきゃ。「瀬川弟クン～？」寮暮らしの学生にスーパーのチラシのチェックは必須事項なのだ。朝に一回見た気がするけど明日はたしか――「翔！」

「――納豆が安かった気がする」

「いきなりどうした？」

「ううん。こっちの話」

いつの間にか兄さんと仁村君が両隣で僕を見ていた。どうやら何回か声を掛けられていたらしい。全然気が付かなかったなぁ。考えことに集中し過ぎて黙々と歩いていたみたいだ。

「で、どうしたの？」

「よよよの人って美人だったよな？」

「そうなのか、翔？」

「莱香ちゃんのこと？」

何かと思えば莱香ちゃんのことか。確かに顔ははっきりと見てるなぁ。

「うん。クールって感じの美人さんだったなぁ」

「ほらな」

「う～ん。もっとしっかり見ておけば良かったか…。というか來香ちゃんって？」

「だって、本人がそう呼んで欲しいって言ってたから」

「瀬川弟は変わってるねえ」

「普通、先輩をちゃん付けで呼ぶのは、言われたからって無理だぞ…」

兄さんは暗がりでまともに顔見れなかったらしい。それに兄さんが目覚めてから結構早くに部室を出たから見るチャンスもなかったんだろう。そして、僕は変わってなんかないやいッ！

「ところで、我が友の瀬川兄弟や」

「なんだよ？」

「なんです？」

「君たちの家、この近所？もう終電ないんだよね」

「えー、それはちょっと…信用できないし」

「まだソレ引っ張るのッ!?」

「??」

これが僕らと仁村君との出会い。以来、仁村君は何かと理由をつけて僕たちの部屋に泊まりに来て、好きに過ごして、私物を持ち込み放置して帰っていく。まあ、綺麗好きなのか部屋の掃除をして行ってくれたりもするんだけど。私物を置いていくのは、自分の部屋は女の子を連れ込むための部屋なので私物は余り置いておきたくないらしい。よく分からないが、モテる男にはイロイロとあるのだろうか。だからといって僕たちの部屋に置かれるのも困りものなんだけどなぁ。

とはいえ、大学で初めての友人を得られたことで僕も兄さんもホッとしたのは事実なんだけどね。

ちなみに納豆はキチンと買えました。

第七話　姉さん

仁村君と出会ってからしばらく経った頃。一本の電話が掛かってきた。

プルルルルル

「電話かぁ」

「兄さん、僕が取るから大丈夫だよ」

立ち上がりかけた兄さんを手で軽く制し、受話器に手をかける。

「もしもし」

『あ、翔太？元気にしてた？』

「姉さん!?」

思わず大きな声を出してしまう。

最後に会ったのが入学式だから、大体一ヶ月ぶりぐらいに話すことになる。

「姉さんからか？」

僕の興奮した声で兄さんは相手を理解したらしい。とりあえず電話中なので横目でみて頷いておく。

「うん。元気だよ！姉さんはどう？」

『元気よ。可愛い娘たちもいるし、幸せいっぱいよ』

「そっか～、良かった」

今の発言通り、僕たちの姉さんは既に結婚している。子供もいて娘ちゃんは三人。もう結婚して四年になるのかな。相手は普通のサラリーマンだ。でも、たしか株で資金運営をしていたり都心の近くに土地をいくらか持っていたりと割と裕福だった気がする。どこで知り合ったかは知らないけど、相手の猛アタックを受けて結婚にまで至った。正直、僕も兄さんも最初は猛反対だったんだよね。姉さんより十も上の歳は良いとしても、二度も離婚を経験してて前の奥さんたちとの子供を一人ずつ連れていたり悪いイメージしかなかったんだ。世間的に見ても決して良い相手とは言い難いし。まぁ、実際会ってみればすごく良い人だったし、何より姉さんが選んだ人だったから僕は割とすぐ納得したんだけどね。兄さんが大変だった。兄さんは僕にも増してシスコンだから今でもあまり良い思いじゃないんだ。姉さんは身内の贔屓目抜きで美人だったから学生時代はよく告白されたりして、そのことを知った兄さんが機嫌を悪くしたりして。間にいる僕はすごく疲れたなぁ。まぁ、そんなわけで兄さんは姉さんとの間に少し距離を作ってしまっているわけなんだけど。まあ、後で電話を変われば良いかな。

「ひなちゃんは喋れるようになった？」

『ええ。この間なんか『ぱーぱ。おつかれさま？』なんていったのよ!!』

「そっかぁ。ひなちゃんももう二歳だもんね」

『もう三歳になるんだから』

ひなちゃんとは一番下の娘ちゃんで姉さんとその相手の子供なんだ。最後にあったのは一歳の誕生日だからもう随分会ってないんだよね。バイトとかで時間があんまり無いのもあるんだけど、兄さんがあまり会いたがらないのも大きいだよね。僕は会いたいんだけど、かといって兄さんを置いていくのも気が引けるから長い間会えてないんだ。姉さんの家庭を見れば兄さんもわかってくれると思うんだけど会いに行きたがらないんじゃ仕方ないし。

『ところで翔太は彼女の一人でもできたの？』

「残念ながら全くアテがないよ」

姉さんは電話の度に毎回こんなことを聞いてくる。図らずとも姉さんと距離ができてしまった僕たちを心配してのことだと思う。特に兄さんの方にはいろいろと言っているらしい。この間もそんな愚痴を兄さんから聞いた。確かに男二人じゃ心配なのだろう。

『まあ、翔太は積極的になればすぐに出来そうだから心配ないわね。問題は祐太ね…』

「まあそれは姉さんから直接言ってあげてよ」

『そうね。じゃあ代わってくれるかしら？』

「りょうか～い」

受話器から耳を離し隣で様子を伺っていた兄さんに渡す。そして部屋の真ん中にある机に向かう。レポートを書いている途中だったんだ。兄さんと姉さんの会話を聞くのもいいんだけど、長くなりそう

だしね。もう夜の九時半過ぎだから早めに終わらせておかないと。明日は一限目から授業が入っていたはずだし。それからはしばらく僕がレポートの上にシャーペンを踊らす音と兄さんの話し声だけが部屋に響いた。仁村君の話だったりひなちゃんの話だったり、彼女作りなさいみたいな話だったり僕の予想通り長い話になっている。時折、姉さんに怒られてるみたいな会話もあったけど。

そして僕のレポートが終わるのと同じくらいに電話も終わった。

「姉さん、なんて言ってた？」

「いつもどおり早く彼女作って結婚しろとか、娘のノロケ話とかだったよ」

「ハハハ。僕も似たような話だったよ」

「それと……たまには顔見せに来い、だと」

複雑な表情の兄さん。やはりあまり乗り気じゃないみたい。

「まあ、落ち着いたら行こうね」

「ああ…。好きな人、ね…」

今回の電話でいろいろ考えることがあったらしく、兄さんは立ったまま考え込んでしまった。そんな兄さんを尻目に机のレポートを片付ける。

ピンポーン！

固まった兄さんを起動させるようにインターホンが鳴る。そんな思惑があったわけではないと思うけど、兄さんは待機状態から回復し

た。そしてそのまま玄関へと向かう。

「空いてるぞ～」

そしてそんなことを言うと、扉がすぐに開いて見知った声が聞こえる。

「祐太ちゃん、翔太ちゃん～。今晩泊めて～」

そして二人分の足音が聞こえると姿を現したのは兄さんと、案の定仁村君だった。余談だけど、呼び方は苗字だとややこしいので名前呼びに変えてもらった。ちゃん付けなのは僕の意図するところじゃないので、あしからず。

「また来たの」

「そう呆れた顔しないでよ～。アイスも買ってきたからさ」

そんな会話をしながらも我が家のようにくつろぎ始める仁村君。確かにその右手にはコンビニの袋があった。

「まったく。今週なんてほぼ毎日じゃないか？」

「硬いこと言わないでよ。オレたちのなかじゃない」

そんなに深い仲だったのかは疑問だけど。それでも毎回お土産持参だったり、片付けを手伝ってくれたりとモテる理由はなんとなくわかる気がするなぁ。

「んじゃ、俺はハーゲンダッツな」

「あ、ちょっと、それはオレと翔太ちゃんのだって！祐太ちゃんにはガリガリ君あるから！」

「兄弟差別なのッ!?」

「翔太ちゃんは可愛いからいいのッ！」

「ますます許せん」

そういうとハーゲンダッツの蓋を開け表面をペロリと舐める兄さん。それは行儀悪いよ。隣では打ちひしがれる仁村君。恨めしそうに兄さんを見ていて、兄さんはご満悦そうに一個三百円のアイスを頬張る。

「ふっふ～ん」

「うぅ～」

「仁村君。じゃあ僕はガリガリ君もらうね」

「いや、オレがそっちで…」

「いや、僕、ガリガリ君も好きだからいいよ。持ってきたのは仁村君だしね」

「そうか。ありがとう翔太ちゃん！」

目に輝きを取り戻した仁村君があずき色のアイスの蓋を開ける。そんな仁村君を横目に見ながらソーダ味のガリガリ君をかじる。

うん。なかなか美味しい。

第八話　講習中はお静かに　その１

翌朝――――――

ジュウウウウ

フライパンの上でベーコンが跳ねる。跳ね飛ぶ油に注意しないといけないな。火傷しちゃうし。

そんな僕は朝食の準備中。メニューはトーストに目玉焼きにカリカリベーコン。それにスープにサラダ。一般的な洋風ブレックファースト。

兄さんと仁村君はまだ就寝中。二人共幸せそうな顔をして寝ています。少し羨ましい。

そうこうしているうちにベーコンが良い具合に焼けたのでお皿に移す。スープやサラダは既にお皿に移してあるので大丈夫。あとはトースターからパンを三枚出して、と。コレで完成。

一限目まではあと一時間くらいなのでちょうどいいくらいかな？といっても此処から大学までは歩いて五分程度だからもう少し遅くても大丈夫なんだけど。でも、お弁当も作らなきゃいけなかったし、早いことは良い事だから大丈夫。

さて、兄さん達を起こそうか。

猫の額ほど広さのキッチンから出て、スヤスヤ眠る兄さん達の元へ。フライパンとお玉は持ってないよ。そんなことしたらご近所迷惑だし。寮生活は互いに気を使わないと。

「兄さん～、仁村君～。朝食も出来たし起きて～」

「ううん……おはよう、翔」

「…ぐぅ…」

「おはよう、兄さん」

兄さんは一回で起きたけど、仁村君はまだ寝てる。今度は兄さんと二人掛かりで起こす。

「仁村君起きて～。パンが冷めちゃうよ～」

「ほら、仁村。起きろ」

「う～ん。今日はオレ自主休講～」

布団に突っ伏したままひらひらと手を上げて、そんな事を言う仁村君。

「仁村君、出席数ギリギリじゃなかった？」

「祐太ちゃん～代返よろしく～」

「まったく…」

結局そのまま起きる気配が無いのでそのまま寝かしておくことにした。トーストは兄さんに二枚食べてもらえばいいかな。そのまま二人食卓について、いただきます、と挨拶し食べ始める。テレビはあるけど仁村君が寝ているのでつけない。

「てか翔は良く起きられたな」

「早起きはもう慣れたからね」

感心したようにいう兄さんにそう返す。なぜ『よく』などというの

かは、昨日の夜の出来事に関係している。昨日の夜は三人で朝までゲームをしていたんだ。タイトルは…なんだっけ？ああ、そう『スラッシュブラザーズ』だったっけ。高い台の上で戦って相手を落っことしあう内容だった。結果は六十試合やって、仁村君が三十五勝、僕が二十勝、兄さんが五勝。友達とやったことあるゲームだから多少は善戦できたほうかな。でもやっぱり持ち主の仁村君には勝てなかった。兄さんの成績は酷いように思えるかも知れないけど最初に比べれば頑張っているほうだと思う。最初は自分から台の上から落ちていってたからね。

そんな理由で僕の睡眠時間は2時間ちょっとだっけ。我ながら頑張ってるなぁ。

早起きに慣れているのは姉さんと一緒に暮らしている頃にも朝食の準備の手伝いをしていたからだね。

そこからは特に会話は無く黙々とパンやサラダを咀嚼する音が響く。朝の低いテンションでは特に会話も生まれない。そして食べ終わり、兄さんには寝癖を直しに行かせる。僕は洗い物だ。それが終わると仁村君の分の朝食にラップを掛け、書き置きを残しておく。トーストは自分で焼いてください、と。

それから、冷ましていたお弁当の蓋を閉じて鞄にしまって準備完了。

玄関に移動し中に声を掛ける。

「じゃあ、行って来ますね～」

「行って来るぞ」

「……ゃ……ぃ」

いってらっしゃい、と仁村君が言った気がした。

アパート脇の歩くとカンカンと鳴る階段を下りて、ポストのすぐ傍の植木鉢の下に部屋の鍵を隠しておく。仁村君が帰るときにはここから鍵を出して閉めていってもらうようになってる。ちょっと用心に欠けるのは仕方ない。わざわざ合鍵を作るわけにもいかないしね。

そこから未だ舗装されておらず少しデコボコな道を歩き出す。程なく一番小さい西門からキャンパスに向かって桜並木の坂を登って行く。四月には激しい自己主張をしていた桜も五月となった今ではすっかり散ってしまって少し寂しさを覚えてしまう。そうして一限目の講習がある三号館が見えてくる。仁村君を起こすのに多少時間を取ってしまったので、少し心配だったけど十分前には着けたみたいだ。

そうして教室に入ると珍しく教室が生徒でいっぱいだった。仁村君曰く、今日――水曜の一限目、一般教養はあまり人気のない授業らしい。ただし、この授業は出ているだけで単位が貰えるという生徒に優しい講義だそうだ。いわゆる、ボーナスステージ。だから出席率は高いらしい。でも、履修を勧めてきた仁村くんが出席しない挙句、代返は少しオカシイ気はするけど。

ともあれ、兄さんと一緒に歩いている席を探す。二人して周りをキョロキョロと見渡すがなかなか良い席が見つからず、しかも講師の先生が早くも教室に入ってきてしまう。

仕方ないので兄さんを引っ張って近くの適当な席に腰を下ろす。

あれ？兄さんの隣の女の人って…

「ん…キミたち…」

「……！」

と、兄さんの隣の女の人が完全にこちらを向いた。そして、気付く。この前見たモデルみたいな美貌に完璧なスタイルは…

「久し振り。元気だった？」

「うん。久し振りだね、莱香ちゃん」

「へ……？」

兄さんは覚えてないみたい。というかさっき莱香ちゃんがコッチを向いたときに呆けてたし。大方、美人過ぎて言葉を失っちゃったんだと思う。でも、いま必死に思い出そうとしているみたい。

「あ、あのっ、えっと…！」

「あれ？こっちは覚えてない？」

「すいません。あまりよく顔を見ていなかったみたいで」

いまだ莱香ちゃんを凝視し続ける兄さん。もう講習が始まるし後は放って置いて講習に集中しようかな。出席しているだけで単位が貰えるといってもしっかり授業は聞いておかないとね。

と、隣でうんうん言っていた兄さんが急に動きを止めた。どうやらお――――――

「あ、あ……ああっ！よよよの人だ！」

――――思いだしたのはいいけど立ち上がって叫ぶことは無いと思うんだ。

この後兄さんが教室を追い出されたことは言うまでもないよね。まったく。そして一緒に追い出された莱香ちゃん、ごめんなさい。後で謝っておかなきゃ。

第九話　講習中はお静かに　その２

兄さんが莱香ちゃんと共に教室を追い出されてまもなく、授業が始まった。因みに仁村君の代返は僕がやっておいた。

ホントに、もう。後で兄さんに一言文句でも言おう。

そう自己完結して前を向く。教壇では、先ほど兄さんと來香さんを追い出した教授がつらつらと言葉を並べ立てているけど、正直興味がないため全く頭に入ってこない。帰りたい衝動に駆られてしまうけど単位のためだから仕方ない。周りをチラリと見れば半分くらいの学生はウトウトと迫りくる睡魔の脅威と格闘している。中には堂々と白旗を揚げ机に突っ伏している人もいる。本音をいえば僕も寝てしまいたいけど流石にそんな勇気は無いし、第一眠気がこないため断念せざるを得ないのが現状。

なので、なんとはなしに教授の講義を右から左へと受け流していると、不意に身体の左側に何か柔らかい感触。振り向けば女の子がもたれ掛かってきていた。因みに莱香ちゃんたちが居た席とは反対側。ってそんなことはどうでも良いや。とりあえずこの状況をどうにかしないと。

顔を覗き見るとどうやら寝ているらしい。小動物チックな可愛い寝顔です。とっても幸せそうな寝顔なんだけど今は講義中なんだし起こした方がいいのかな。それともこのまま寝かせておいてあげるべきかなぁ。

「…う、うぅ…ん？」

そんなことを考えているうちに女の子は身を捩らせて目を薄く開いていた。少しの間、目を瞬かせていたんだけど状況に気づいたのか、バッと身体を起こした。因みにボーっとしていた顔も可愛かったのは内緒だ。

「ご、ゴメンなさいッ。寄っかかっていたみたいで…」

「いや、別に軽かったし大丈夫だよ」

顔を赤くして謝ってくるので、なぜかコッチが申し訳ない気持ちになってくる。

「ホントにゴメンなさい。あの…名前は？」

「国文科の瀬川翔太です。そっちは？」

「菅谷ミキっていいます。人文科だよ……って翔太？女の子にしては変わった名前だね」

「……僕は男です」

「えッ!?」

またか。確かに今日の服装は中性的なモノだけど、せめて名前で気づいて欲しかった…ッ！

視界になんだか霧がかかってるみたいだ。あれ、おかしいな？

「えッ、ちょっと、なんで涙目なの!?」

「ううん、なんでもないよ。うん、なんでもない……」

「いや、スゴく気になるんだけど!?私なんかしちゃったかなッ!?」

目の前でまたアワアワし始めた菅谷さん。それを見ていると落ち着いてきて視界がクリアになってきた。そうすると周りの数人の学

生が何事かとこちらを見ていることに気づいた。僕たちの声がどうやら大きかったらしい。

「もう大丈夫だから気にしないで。それにあんまり大きい声出しちゃうと兄さんみたいに追い出されちゃうよ」

「あっ、そうだね。というか、美人の先輩と追い出されてたのお兄さんなんだぁ」

先程より声を潜めて話す僕たち。こっちを見ていた学生も再び惰眠を貪る作業に戻っていった。あれ？講義を少しは聞いてあげようよ。いや、僕たちも聞いてないけど。

「そうだよ。ちなみに先輩のほうは來香ちゃんだよ」

「へぇ……來香ちゃん？あぁ、織田先輩かぁ」

どうやら來香ちゃんのことは知っているらしい。そういえば仁村君が來香ちゃんは学内で有名だって言ってたっけ。たしかに少し変わってるもんね。

「ところで随分気持ちよさそうに寝てたけど疲れてたんだね」

「うっ。昨日は少し遅くまでバイトしてたんだぁ。だからちょっと疲れちゃって」

「お疲れ様です」

バイトかぁ。兄さんは結構してるけど僕は家事があるから短期のモノくらいしかやってないんだよね。

でもやっぱり深夜のバイトはお給料が良いんだよね。兄さんもそ

れやって授業中寝たりすることもあったから菅谷さんの気持ちは分かるや。

「でも、女の子が夜遅くまでバイトするのは危ないんじゃない？」

「そうなんだけど、今月ちょっと厳しくて」

「菅谷さんは可愛いんだから余計危ないしねぇ」

「えっ……」

急に少し俯いてしまう菅谷さん。顔も少し赤い気がする。あれ？僕なんかしたかなぁ。

「あ、ごめん。なんか気にしちゃうことといちゃったかな？」

「う、ううん。なんでもないよっ。瀬川君も夜の一人歩きは気をつけてねッ」

「ちょっと待って。僕は男だよッ!?」

途中から菅谷さんの調子が少し可笑しかったけど、結局菅谷さんと話している間に講義は終わってしまったのだった。

第十話　兄さんの初恋

菅谷さんと話していただけだった講義は終わり、折角だからと連絡先を交換したあと、僕は追い出されていた兄さんを探していた。兄さんは放っておくとサボりそうだからね。

それにしても大学生活が始まってからそう経たないうちに友達ができるとはなかなか幸先の良いスタートを切ることが出来た気がする。うん。今日は夕飯に兄さんの好きなモノでも作ってあげよう。

それにしても見当たらないなぁ。今日の授業の予定は兄さんと一緒だったはずだから、あと二限分講義残っているはずなんだけど。校舎に沿って練り歩きながら周りに視線を送る。

う～ん。食堂は…一限目の途中から行くことはないだろうし、お金の余裕もあんまりないし。

だとしたらあそこだろうか。桜並木と校舎の間にあるベンチ。そこは休み時間などに主に一年生がたむろっていたはず。ちょうどさっきの教室からも近いし行ってみるべきかな。

そう思い立つと僕は踵を返し進路を定める。とりあえず行動は迅速に、だね。

鮮やかなピンクからみずみずしい濃緑に色を変えた桜並木を歩き目的地に向かい歩を進める。ずんずんと歩み続けていたが、前方にふと、見覚えのある姿を目に留まる。小走りに駆け寄り声をかける。

「おーい、來香ちゃん。さっきぶりです」

「あ、翔太」

僕の普通な視力が捕捉した人物は來香ちゃんだった。あいも変わらず無表情な彼女なら兄さんの居場所を知っているかも。でもその

前に謝っておかなくちゃいけない。

「さっきはうちの兄さんが迷惑かけちゃってゴメンなさい。一緒に教室追い出されちゃってたけど…」

「別に気にしなくていい。思ったほど面白い講義ではなかったし、祐太と話すことが出来た」

「そう？ならいいんですけど…。ところでその兄さんがどこに居るか知ってます？」

「さっきまであそこで喋っていたから近くにいるはず」

そういう來香ちゃんの指の先には予想通りベンチがあった。まだ近くにいるなら早く探さないと。

「ありがとうございます。じゃあ、また」

「うん。また」

そういうと來香ちゃんは僕が歩いてきた方向に行ってしまった。おそらく次の講義に向かうんだと思う。その後ろ姿を少し見てから僕もベンチの方へ歩きだしたのだった。

兄さん何してるんだろう？

結果をいうと兄さんはすぐに見つけられた。だけど、そこは大学の外だった。

フラフラと歩く兄さんに追いつき声をかける。

「兄さん。どこ行こうとしてるの？次の講義が始まっちゃうよ？」

「うん……」

「……兄さん？」

変だ。今の兄さんの様子を表すならその一言。返事は返してくれたんだけど、止まってくれないし目の焦点もあってない。質問をして様子を見よう。

「なにかあったの？」

「うん……」

「具体的には？」

「うん……」

「……兄さんは筋金入りのシスコンだ」

「うん……」

うん、重症だ。どうしよう。今までにない状況なために焦ってしまう。こんな様子の兄さんは今まで一緒にいて初めてだ。なにかがあったのはたしかだけど、この短時間で一体なにが……？僕がいない時間で起きたこととといえば來香ちゃんと話したことぐらいだし。

「うん……。うん……」

「あッ、ちょっと!?待ってよ兄さん！」

少し立ち止まって考えてるうちに兄さんと大分距離が開いていた。

……いつの間に。とりあえず今の兄さんに話が通じないことがわかった。

今の兄さんを一人にしておくわけにいかないか。

そう、結論付け兄さんを追うため走り出す。

……あ～あ、講義サボっちゃった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ズッー、ほれで、ズルーーッ、ふぉんなじょうたひなはけ、ズズズッー、か」

「仁村君、食べるか喋るかどっちかにして」

無言で昼食のラーメンを啜り始める仁村君。一瞬イラっときたけど、ガマンガマン。

あ、仁村君のセリフは『それで、そんな状態なワケか』っていってました。

兄さんになんとか追いつき着いた先は寮の自室だった。どうやら無意識に帰ってきたらしい。そしてキッチンで我が物顔でラーメンを作っている仁村君を発見し、ここまでの経緯を説明し今に至る。

因みに僕と兄さんは先にラーメンを食べていて、兄さんはさっきからちゃぶ台の上に肘をおいて虚空を見つめ静止している。

「ふ〜、旨かった。事情は大体わかったけど」

「えっ、ホントに？」

「ああ、多分」

ラーメンを食べ終わった仁村君が自信ありげな顔でコッチを見る。流石イケメン、絵になる。

「ズバリッ！祐太ちゃんは織田先輩に恋しちゃったんだ！」

ババーーン！

そんな効果音を出す勢いで兄さんを指差す仁村君。人を指差すのは良くないよ。指を下ろさせて僕は仁村君を優しい眼差しで見つめる。

「そうなのかなぁ？確かに來香ちゃんは美人だけど、みんながみんな仁村君みたいな人じゃないんだよ？」

「今俺をそこはかとなく馬鹿にしなかった翔太ちゃん？」

「いや、してないよ」

「いいや、絶対したッ！」

「というか兄さんが恋なんて……「そうか…!?」……兄さん？」

唐突に言葉を発した兄さんに僕と仁村君は会話を止め怪訝な視線を向ける。

なにか閃いた様子の兄さんがちゃぶ台を大きく叩くと勢いよく立

ち上がり叫んだ。

「これが恋ってやつなのかッ!!!」

ええっーーーーッッ!!!

そう遠くない姉さんへ。

兄さんがどうやら初恋に目覚めたらしいです。

第十一話　恋は盲目

「ストップ、兄さん！」

「待ってよ、祐太ちゃん！」

堂々の初恋宣言のあと、なにを思ったか兄さんはいきなり部屋を飛び出した。

進行方向から考えて行き先はサークル棟らしくそのあとを僕と仁村君が話しかけながら追っているんだけど、坂を登っているのにもかかわらず兄さんの歩くスピードが全く落ちない。こちらを気にせずにズンズンと進む兄さんは疲れを感じていないのだろうか。僕も仁村君も既に息が切れているっていうのに、これが恋の力ってヤツなのかな。

「あぁ、もう兄さん！待ってて！」

「……なんだよ」

ようやく反応してくた兄さんは立ち止まってこっちを振り向く。

良かったぁ。もうこっちは肩で息をしている状態なんだよね。そんな僕たちの様子を見た兄さんは渋々といった表情で近くの自販機とベンチに近寄っていく。どうやらこれ以上無視する気はないらしく話を聞いてくれる気にはなったみたい。そんな兄さんを追って汗だくの僕と仁村君は自販機で飲み物を買って喉を潤し、息を整える。ふぅ、やっと落ち着ける。

「で、俺の恋路を邪魔した理由を聞かせてもらおうか」

こちらの息が整ったタイミングで憮然とした態度を見せる。あぁ、

やっぱりだけど來香ちゃんに会いにいくんだね。スポーツドリンクを飲み干した仁村君と顔を見合わせ、先に話してもらうことにする。

「祐太ちゃん……あの人は止めとけ」

「断る。翔はなんだ？」

「だぁぁああ!!?もう少し俺の話を聞け！」

即答の兄さんに狼狽する仁村君。兄さんの意志は硬いみたい。初恋で一目惚れ、そしてベタ惚れといったところだろうか。そんな兄さんは仕方なくといった様子でもう一度仁村君に向き直る。

「ぶっちゃけ祐太ちゃんにはあの人は荷が重いと思うわけよ」

「そんなのわからないだろう」

「根拠も情報もあるから、落ち着いて聞け」

再び歩きだそうとする兄さんを止め、仁村君は胸ポケットから手帳を取り出して何かを探しているらしくパラパラとページをめくり始める。

やがて該当ページを見つけたのかそのページを読み上げていく。

「えーと。織田來香。歳は二十で所属は人文学科の二年生。入試はトップの成績で、運動も出来るらしく体育の授業で現役テニス部相手に一ポイントも取らせなかったらしい」

「うわぁ……」

「へぇ……」

思わず感嘆の声が出てしまう。まさに完璧な人といった感じだ。兄さんは想像通りだったのか自慢げに頷いている。いや、すごいのは兄さんじゃなくて來香ちゃんだからね。

うん。ソレは別にいいんだよ。ソレは。問題はなんでそんな情報を仁村君が持っているかだよ。おそらく女の子から聞いた情報だとは思うけど、まさかその手帳、全部女の子の情報じゃないよね？

そんな僕の懐疑の視線を知ってか知らずか、仁村君はパタンッ、と手帳を閉じ、兄さんを真っ直ぐ見つめる。

「それにあの容姿だ。祐太ちゃんも想像していたと思うが入学当初、彼女を引き込もうと熱心に勧誘するサークルも多かったし、それ以上に言いよる男も山ほどいた」

「來香さんなら当然だろう」

「なのにだ！」

突然仁村君の声が大きくなる。

「今現在、彼女に近づこうとする男はほとんどいない！さらに友達らしき人物すら確認されてない！この現実を知って祐太ちゃんはどう考えるよ！」

「わかった。來香さんはシャイなんだろう？」

「よーし、わかった！翔太ちゃん、お前の兄貴の目はどうにかしてるぞ！」

「いや、むしろ脳みそでしょ？僕が近くについていながら情けない限りです」

「おい、お前ら。俺は間違ったことなんて言ってないぞ」

別に間違えてなんかいないだろうけど清々しいまでに当たってないよ。明後日の方向だよ。恋は盲目って言うけど、その言葉は正しかったみたいだ。全く見えてないよ。

「要するに……かなりの変人なんだよ、織田來香って人は」

「変人……？」

「でなきゃ、路上観察会なんて、妙なサークルに入らないだろう」

「……よし、わかった。路上観察会に入れば來香さんと一緒にいられるんだな」

「「全然わかってない⁉」」

ここまで盲目だと周りに迷惑だよ。もう知ったこっちゃないと言わんばかりにベンチで頭を抱える仁村君。それをチラッと見た後、兄さんはこちらに向く。

「で、翔は何が言いたいんだ。俺は一刻も早く入会届けをもらいに行きたいんだが」

「うん、別に僕は來香ちゃんを止めとけっていうわけじゃないよ」

「そうなのか」

「うん。記念すべき兄さんの初恋なんだしむしろ全力で応援するよ。だけど……」

「だけど？」

「もう少し落ち着いて行動してね。急いては事を仕損じる、だよ。今だって仁村君に教えてもらわなかったら來香さんのことほとんど何も知らなかったでしょ？」

「……まぁ、確かにそうだな」

「それに会いに行きたい気持ちはわかるけど、会ってどんな話をするの？何も考えずにただ会っても、会話が盛り上げられなかったら、マイナスなイメージしか持ってもらえないよ」

「ぐっ……」

「だからしっかり気持ちをコントロールして、頑張って成就させてよね。協力するから」

「……おう！任せとけ！來香さん、今行きますっ!!」

言うやいなや、急な坂をものともせず駆け上がって行く兄さん。言ったこと、ホントにわかってるかな？

だんだん遠くなっていく兄さんの背中を見て思わず苦笑いがこぼれてしまう。

まぁ、シスコンな所為ですっかり女っ気がなかった兄さんの初恋なんだししっかりサポートしますか。

……あ、そういえば新歓コンパの入部の件、自然に片付いたなぁ。

AFTER

「ところで翔太ちゃんは入会するわけ」

「まぁ協力するって言っちゃったしねぇ」

「そっか、じゃあ俺も入るか」

「えッ、なんで？」

「なんでって俺も勧誘されてたし……祐太ちゃん達といると面白いしね！」

「後半がやけに強調されてたのは気のせいかな？」

「気のせい、気のせい。ところでさっきは見事に諭したな。兄貴と違って経験あるんだな」

「え？僕は恋したことないよ？」

「え〝え？」

「ただ、兄さんのことを考えたら自然と口が動いたっていうか」

「……」

「あれ？仁村君、どうかした？なんか知らないけどその変なモノを見る目はやめてほしいんだけど」

第十二話　某蛇の人

兄さんの初恋騒動から三ヶ月が経ち、僕たちの住む八王子は夏真っ盛り。

そして、学生の天敵であるテスト期間も今が最高潮。

終業チャイムがなると同時に教室のあちこちから様々な感情を乗せた溜息が零れる。

因みに僕の右隣が乗せる感情は失望、だろうか。

「ダメだぁ……」

「お疲れ様ぁ。はい、兄さん」

「ほいよ」

そんな右隣の仁村君を労いながら左隣の兄さんに僕と仁村君の答案を重ねて回す。

……まぁ、仁村君の答案は溜息も頷けるほどに埋まっていなかったのだけれど。

「つーか国文科に英語のテストなんていらないだろ？この国の言語は日本語じゃん」

「まあまあ。言いたいことはわかるけど」

「世界的な公用語は英語なんだし覚えていて損はないだろ？」

「俺は一生日本から出ない！」

「無駄に気合の入った決意だね」

「てか、お前この間から良く遊んでる女の子って留学生じゃなかったか？」

「あの子の故郷は中国。俺、中国語なら少しはしゃべれる」

机の上でうだりながら応える仁村君。

仁村君は女の子のためならなんでもできる気がする。そのうち今日の決意なんか忘れて女の子目当てに海外に行きそうだよ。

まぁ、こんな地獄のテスト期間も今日で終了な訳で。明日からは学生たちの希望、夏休みだ。

お祭りに海水浴、プール、花火ｅｔｃ…。挙げればキリのない程の娯楽、そしてそれをするための時間もあるけれど生憎僕にはあまり縁がないことなんだよね。彼女がいるわけでも無いし。友達はそれなりにいるけどみんなサークルとかで忙しいらしいし。

そんな訳で夏休みはちょっとバイトでもしてみようかなぁ、なんて考えてます。そういうのは普段兄さんに結構頼っているから少しでも楽にしてあげないと。

それに兄さんは夏休みもやることがあるだろうし、ね。

「それじゃ、試験も終わったし部室に行くか」

「オレも久々に顔出しとこうか」

「來香ちゃんや佐古先輩、いるかな？」

そんな事を言いながら、兄さんと仁村君の後に続いて教室を出て行く。そしてもう完全に覚えた道のりを歩きサークル棟へ向かう。

そう。僕たち三人は結局、路上観察研究会――ロ研に無事入会したんだ。これがさっき言ったことと重なる。夏休みも勿論サークル活動はある……はずなので、兄さんには頑張って來香ちゃんと二人き

りになってなんとか距離を縮めてもらおうというわけ。バイトの理由はロ研に行くことのできないという口実作りでもあるんだ。仁村君はすでに了承中。というか、僕の前を歩くイケメン君は他のいろんなサークルにも顔を出しているらしいし、女の子との約束もあるらしいから元からそんなに来れないっぽいし。

問題はあまり空気の読めそうに無い佐古先輩かなぁ。

そうこう考えながら蛇行する坂道をゆるゆる歩き、傾斜角の大きい階段を登るとあるのが目的地のサークル棟。文化系や体育系のサークルの部室が所狭しと詰め込まれた此処の二階の一室が僕達ロ研の部室である。

コンクリートがむき出しの階段を登って二階に上がるとなんか不自然なモノがあった。

具体的に廊下の真ん中にR18な雑誌が三冊、強烈な違和感を発しながら鎮座していた。

うん。噛み砕いて言えばエッチな本。そしてその奥にはもっと強烈な違和感を発するダンボール箱があった。横のポーチといい、覗き穴と思わしきスリットから窺う目といい完全に———

「———莱香ちゃｎ「気付いてない振りをしろ」……」

「いや、あれはどうかんがえても織田先ｐ「気付いていない振りをしろ」……はい」

兄さんに黙らされる僕と仁村君。いや、どう考えても莱香ちゃんだった。よく見たらダンボールにも『らいか』と書いてあった。あれでも本気で隠れているつもりなのが莱香ちゃんなんだ。というか何のためにそんな某蛇の人の真似をしているんだろう？それにこの床のエッチな本。この三ヶ月間結構な頻度で会っているけど相変わらず行動原理がナゾな人である。

「わ、わあ。こんなところにえっちな本がー」

エッチな本を拾い上げながらの兄さんの見事なまでの棒読みな台詞。いや、いくらなんでもそれはないよ兄さん。てか、何にも気付いていない振りをして演技をするの!?

「ほら、なんと破廉恥だとは思わないかー――――我が弟よー」

「え〝……」

しかもここで僕に振ってくるの!?僕、こんな茶番劇するの嫌なんだけど！

いや、でも、兄さんの必死な目を見ちゃうと……あぁ、もう！なるようになれ！

「ほ、ほんとだー。ほら仁村君もそう思うよねー？」

「!?」

残り二冊の本を拾い上げ、一冊を仁村君に手渡す。ふふっ、こうなったら仁村君も道連れだよ。

なんかすごい顔してるけど、さっき僕が巻き込まれたときに安心した顔したのちゃんと見てたんだから。

兄さんにも小突かれ仁村君も渋々演技し始める。

「な、中身もみてしまおうかー……うわ、なんだこれはー」

「どれどれー、みんなで交換しようではないかー」

「う、うん。そうだねー」

微動だにしない莱香ちゃんを傍目に演技を続ける僕達。互いに

持っているエッチな本を交換して中身を見る。見開きで大胆なポーズをとる水着の美人さんがいた。僕は正直あんまりこういうのに興味が無いんだよね。仁村君は経験豊富な所為かあまりこういう本をみてもあまり何も感じないらしい様子。

そして兄さん。ロリ系？ていう感じのかなり過激そうな漫画をみて「うお…」とか思わず素の反応らしきものをみせていた。いや、兄さん、ソレも演技なんだよね？さすがに二次元《そっち》はダメだって。莱香ちゃんも見てるの忘れてないよね？え、ちょ、なんで懐に隠そうとしてるの⁉まさかお持ち帰りするんですか⁉いや、ちょっと弟としてソレは流石に見過ごせないっていうか……ッ

異様な空気が漂う廊下に突如、まるで不釣合いな明るい音が鳴り響いた。そしてその音の発信源であるダンボール箱の上部が開き、中から莱香ちゃんが携帯を耳に当てながら出てくる。

「うん……うん、わかった……」

何度か相槌をうった後に電話を切るとこちらを振り向いた。

「会長、今日は来れないって」

「は、はあ。そうですか……」

「部室行く」

何事も無かったかのようにダンボールを丁寧に畳んで脇に抱え部室に入っていく。そのダンボール、気に入ってるんだね……。

こう、なんていうか、いたたまれない空気を引き連れて僕達は莱香ちゃんの後に続いて部室には入る。

室内は一週間近く出入りしてなかった所為か少しホコリ臭い。こ

の暑い部室にはクーラーはないため、兄さんと莱香ちゃんと一緒に窓を開け放ち、唯一の空調設備である扇風機の配置を工夫したりしてなんとか涼を取ってみた。ホントは綺麗好きの仁村君と一緒にこの部屋の掃除をしたいんだけど、残念ながら今日はこの後用事があるんだよね。因みに仁村君は僕がこの後用事があるって言ったら、兄さんと莱香ちゃんを二人きりにするため気を利かしてすでに帰宅しました。僕と一緒のタイミングで出て行ったら少し変だしね。

「それじゃ、僕は用事があるから行くね」

「そう。じゃあ、また」

「いってらっしゃい」

二人に挨拶して部室を出る。約束した時間には少し早いけど、早めに待っといた方がいいし二人きりの時間は多いほうがいいだろうしね。

扉の向こうから聞こえてくる兄さんのなにやら慌てた声にくすりと笑いながら僕は待ち合わせ場所へと向かうのだった。

……兄さん、エッチな本持って帰ってこないよね？